

五箇山地域の観光に関する一考察

Tourism in Gokayama, Japan

佐藤悦夫
SATO Etsuo

1 はじめに

岐阜県の白川郷と富山県の五箇山地方は、8世紀から始まった白山を信仰の対象とする山岳信仰の修験の行場として開かれ、長い間天台宗の影響下にあったと言われている。また、13世紀以降になると浄土真宗がこの地域にも浸透し、各集落に寺や道場が設けられ、江戸時代になると五箇山は、加賀藩領となった(斉藤、稲葉 1996)。五箇山とは、現在の富山県南砺市の旧平村と旧上平村の両地域を示す呼称である。平村、上平村が誕生したのは、明治22年のときである。村の名称は五箇山地方に伝わる「平家落人伝説」からきていると言われている。明治以降、相倉集落、菅沼集落もそれぞれ村の一部となり近代的な行政組織に組み込まれ、現代に至っている。

富山県の調査資料によると、平村では人口数のピークは1930年の5,091人であった(富山県 2004)。それ以降は1947年に若干の増加は見られるが、減少の一途を辿っている。上平村でも1940年に3,141人とピークを迎えているが、平村と同様にそれ以降は減少の一途を辿っており、2003年には1,000人をきっている。人口が減少した主な要因としては、戦時期に地方の農山村へ疎開していた者や都市から職を求めて地方へ来た移住者が、1950年から約3年間に及び朝鮮動乱により、工業が復興したことによって、その大半が都市へと帰ったことがまず挙げられる。また工業の発展によって農山村で生活していた者、特に若年層を中心に、他地域へと移住する者が増えていったことにも注目したい。平村では1955年代後半からこの動きが顕著になってきており、人口の減少を深刻なものとしてとらえている。上平村でも同時期ごろから疎開者達が都市へと帰っていき、また上平村の義務教育を終えた若者たちも、進学などによって都会へと流れ出している。

五箇山地域は、合掌家屋と集落の歴史的景観、そして周囲の自然環境などが良好に保存されていることが、日本を代表する歴史的遺産として高く評価され、1995年に五箇山の合掌造り集落(相倉、菅沼集落)が、岐阜県白川郷の萩町集落とともに世界遺産委員会で正式に世界遺産として登録された。相倉集落は、戸数27戸、人口90人(1994年8月現在)で、保存地区に現存する合掌造りの家屋は、20棟であり、これらの多くは江戸時代末期から明治時代に建てられたものである。一方、菅沼集落は、戸数8、人口40人(1994年8月現在)で、8棟は江戸時代後期から明治時代に建築、1棟は1925年に新築されたものである。これらの地域の維持、修理は、所有者が主体的に、ときには「組」による共同作業により適切に行われていた。また、1970年の史跡指定以降は、国及び県、村の補助を受けながら従来と同様に所有者または「組」の共同作業によって維持修理が行われている(斉藤・稲葉 1996)。

このように五箇山地域は、人口減少が起きている地域であるが、世界遺産に登録された歴史的景観を持つ地域でもある。この地域において持続的な発展を可能とするためには、歴史的景観を有効に活用し従来のマストゥーリズムとは異なる観光開発、すなわち観光資源を維持しながら地域住民が主体となった観光開発が重要と考える。本稿では、富山県の観光客の動向分析、五箇山地域の住民の意識調査を踏まえて五箇山地域の今後の観光のあり方について考察する。

2 観光客の動向

2-1 富山県における観光客の動向

富山県における観光客の年度別入り込み数を見ると、1984年から1991年にかけて年平均約5.4%ずつ増加している(表1)。1992年の観光客入り込み総数は26,997千人で前年に比べ16.4%増加し、また1996年に観光客入り込み総数は28,514千人で前年に比べ15.6%増加している。富山県では1992年と1996年に観光客入り込み数が大幅に増加したが、その要因は日帰りの県内客が夏場に増加したからであった。これは、1992年に開催された「ジャパンエキスポ富山92」(動員数240万人)、1996年の増加は白川郷・五箇山地区の世界遺産登録の影響と考えられる。2003年からは、減少傾向にある。隣県の石川県の場合も2004年の観光入込客数は、「金沢21世紀美術館」や「花のミュージアム フローリィ」などの新設の施設では順調ないり込みがあったが、6月以降の猛暑や台風の上陸などの天候異変や自然災害等の影響で、前年比3.4%減の20,784,000であった(石川県2004)。特に、石川県の場合は、2月と7月を除いたすべての月において観光客が前年と比較して減少している。

日程別入り込み数では、宿泊客が年600万人前後に対して、日帰り客が1,000万人から2,000万人と増加傾向にあり、日帰り客の増加が富山県全体の観光客の増加に繋がっている(表2)。特に1992年が20,564,000人、1996年が21,568,000人とそれぞれ前年と比べ顕著な増加をみせている。宿泊客の入り込み数の推移については、1996年が6,946千人と最も多く、その後減少傾向にある。

県内外別入り込み数では、県内客については1984年から2003年まで増加傾向にある(表3)。1992年に18,217,000人、1996年に18,951,000人とそれぞれ前年に比べ大幅に増加している。県外客については1996年に9,563,000人でピークを迎え、その後は減少傾向にあったが、2003年からは再び増加傾向にあり、2004年は8,627,000万人まで回復した。富山県の場合は、県内観光客と県外の観光客の割合は、2004年のデータでは、県内客66%に対して県外客34%(石川県の場合は、県内客45.9%、県外客54.1%)と県内客の割合が大きい。2004年の観光客の落ち込みは、県内客が大きく減少したことによる。

四季別入り込み数では、冬、春、秋に関してはそれぞれ増加傾向にあるが、夏に関しては、増減が大きい(表4)。特に1992年の夏には、13,056,000人、1996年には11,666,000人と大幅な増加を示している。2004年は、冬、春の観光客は増加しているが、夏、秋の観光客が減少し、全体として720万人減(前年比2.6%減)の約2700万人となっている。この夏、秋の現象の要因として、夏における大型台風や隣県の豪雨被害またアテネ五輪消費の影響をうけての消費の抑制、秋においては台風23号による海王丸の座礁などがあげられる(富山県2004)。

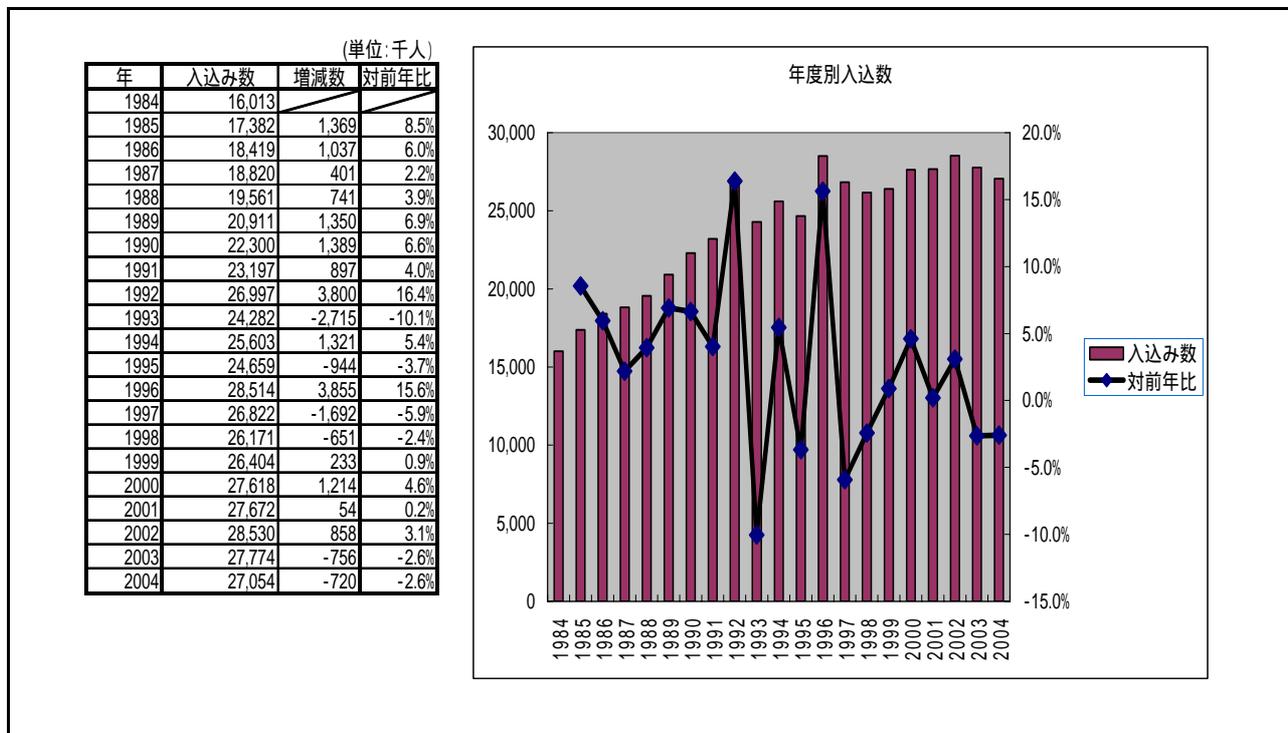
2004年の主要観光地別の入り込み数では、「立山黒部アルペンルート」が前年比7.8%減少の約104万人(全入り込み数に占める割合は3.8%、以下同様)、「高岡古城公園」が1.6%増の約99万人(3.6%)、「県民公園太閤山ランド」が5.0%増の約69万人(2.6%)、「飛越ふれあいの里」が3.0%増の約69万人(2.6%)、「五箇山」が11.7%減の約68万人(2.6%)と続いている(表5)。「海王丸パーク」は、前年比32.4%減であったが、これは上述した海王丸の座礁が大きな影響を与えている。

目的別入り込み数では「風景旅行」が20~30%の割合、「名所旧跡」が10~20%、「温泉旅行」が10%前後、レクリエーションが5~7%の割合であり、富山県では自然観光、歴史観光が好まれていることが窺われる(表6)。

富山県の観光客の動向の特徴は、(1)観光客の総数は、27百万人前後で石川県より多いこと、(2)県内観光客の割合が多いこと、(3)風景観光や名所旧跡の観光が好まれていること、等があげられる。今後は、美しい自然環境や名所旧跡を「売り」にして、県外観光客や外国人観光客をいかにして誘致するかが課題となる。県外観光客の誘致のためには、他の観光地にはない富山独自の観光商品の開発とリピーター客や連泊客を増やすこと、また外国人観光客誘致のためには、距離的に富山に近いアジアの観光客をターゲットにした商品開発

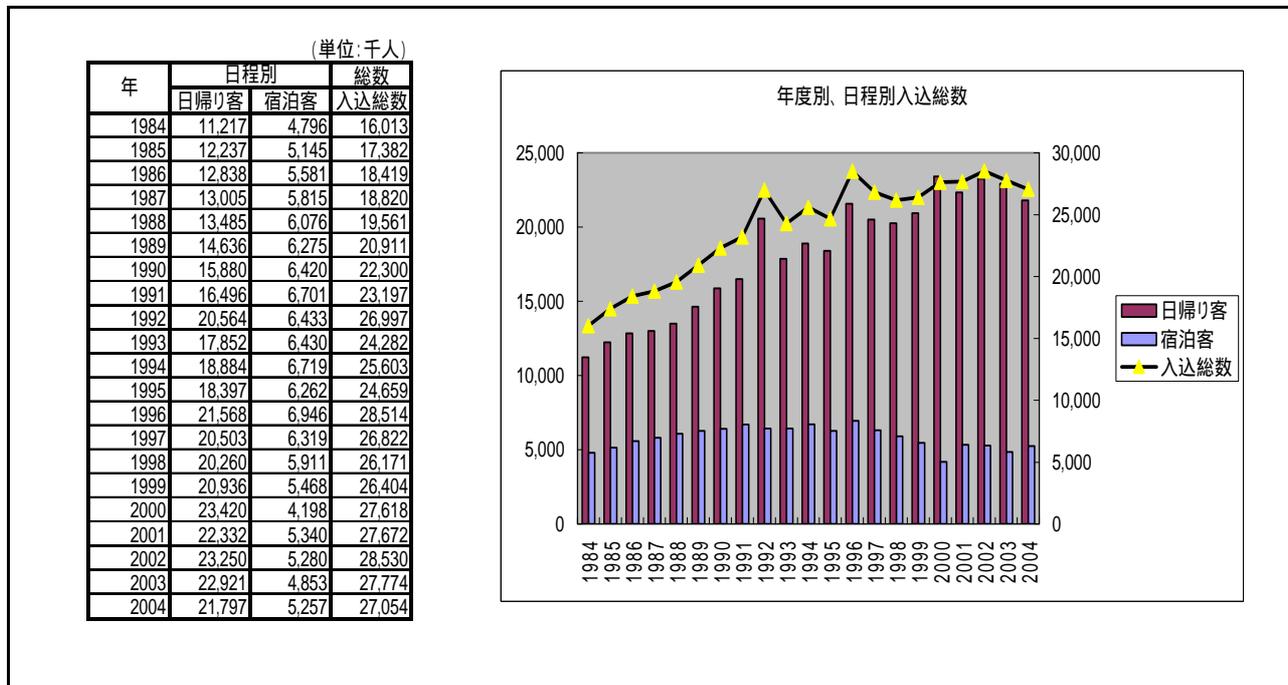
が重要と考えられる。

表 1：年別入込数



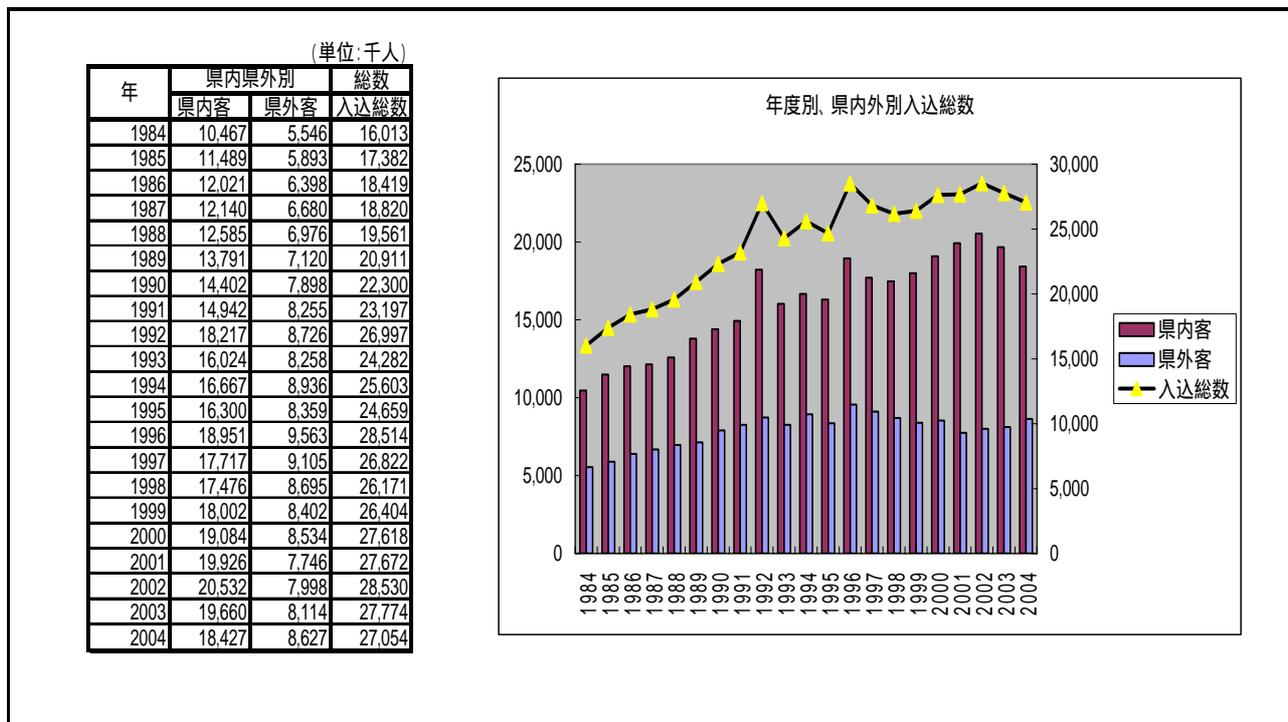
(出所：富山県商工労働部観光課 2003、2004)

表 2：年別、日程別入込数



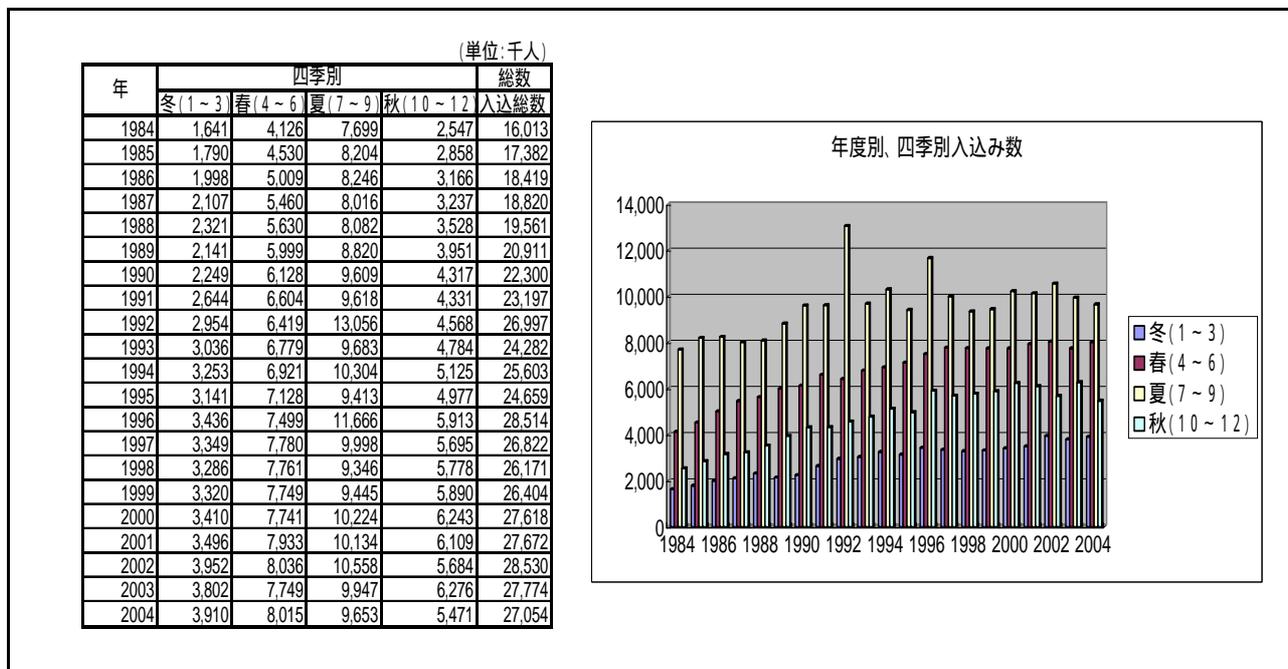
(出所：富山県商工労働部観光課 2003、2004)

表 3 : 年別、県内外別入込数



(出所：富山県商工労働部観光課 2003、2004)

表 4 : 年別、四季別入込数



(出所：富山県商工労働部観光課 2003、2004)

表5：2003年、2004年の主要観光地別入込数

名称	2004年入込数	入込総数に対する割合	対前年比	2003年入込数
立山黒部アルペンルート	1,038,194	3.8%	-7.8%	1,125,641
高岡古城公園	985,304	3.6%	1.6%	969,420
県民公園太閤山ランド	691,490	2.6%	-5.0%	727,960
飛越ふれあいの里	690,785	2.6%	3.0%	670,835
五箇山(平・上平村)	678,000	2.5%	-11.7%	768,000
氷見フィッシャーマンズワーフ海鮮館	673,800	2.5%	7.8%	625,100
海王丸パーク	577,400	2.1%	-32.4%	854,700
宇奈月温泉	514,905	1.9%	13.1%	455,398
黒部峡谷鉄道	511,206	1.9%	-7.2%	550,586
桜ヶ池	490,583	1.8%	-3.6%	508,649
主要観光地の合計	6,851,667	25.3%	-5.6%	7,256,289
入込み総数	27,054,000		-2.6%	27,774,000

(出所：富山県商工労働部観光課 2004)

表6：年別、目的別入込数

(単位：千人)

年	入込総数	風景旅行		名所旧跡		温泉旅行		海洋性(レクリエーション)		山岳(レクリエーション)		スキー場		行催事		合計
1984	16,014	4,759	29.7%	1,973	12.3%	1,643	10.3%	2,261	14.1%	1,103	6.9%	661	4.1%	3,614	22.6%	100.0%
1985	17,382	5,092	29.3%	2,151	12.4%	1,771	10.2%	2,300	13.2%	1,221	7.0%	707	4.1%	4,140	23.8%	100.0%
1986	18,419	5,557	30.2%	2,437	13.2%	1,916	10.4%	1,605	8.7%	1,281	7.0%	820	4.5%	4,803	26.1%	100.0%
1987	18,820	5,819	30.9%	2,545	13.5%	2,087	11.1%	1,394	7.4%	1,324	7.0%	610	3.2%	5,041	26.8%	100.0%
1988	19,561	6,021	30.8%	2,600	13.3%	2,213	11.3%	1,489	7.6%	1,345	6.9%	652	3.3%	5,241	26.8%	100.0%
1989	20,911	6,776	32.4%	2,616	12.5%	2,408	11.5%	1,717	8.2%	1,487	7.1%	397	1.9%	5,510	26.3%	100.0%
1990	22,300	6,935	31.1%	3,446	15.5%	2,095	9.4%	2,051	9.2%	1,665	7.5%	618	2.8%	5,490	24.6%	100.0%
1991	23,197	7,260	31.3%	3,769	16.2%	2,162	9.3%	1,841	7.9%	1,784	7.7%	792	3.4%	5,589	24.1%	100.0%
1992	26,997	7,271	26.9%	4,810	17.8%	2,171	8.0%	2,171	8.0%	1,771	6.6%	908	3.4%	7,894	29.2%	100.0%
1993	24,282	7,201	29.7%	5,138	21.2%	2,206	9.1%	1,601	6.6%	1,727	7.1%	904	3.7%	5,505	22.7%	100.0%
1994	25,603	7,095	27.7%	6,008	23.5%	2,355	9.2%	2,229	8.7%	1,938	7.6%	929	3.6%	5,049	19.7%	100.0%
1995	24,659	6,945	28.2%	6,034	24.5%	2,172	8.8%	2,102	8.5%	1,695	6.9%	871	3.5%	4,840	19.6%	100.0%
1996	28,514	7,370	25.8%	6,174	21.7%	2,485	8.7%	2,059	7.2%	1,893	6.6%	1,024	3.6%	7,509	26.3%	100.0%
1997	26,822	7,262	27.1%	7,274	27.1%	2,313	8.6%	1,856	6.9%	2,004	7.5%	845	3.2%	5,268	19.6%	100.0%
1998	26,171	6,806	26.0%	6,513	24.9%	1,996	7.6%	1,582	6.0%	1,341	5.1%	809	3.1%	7,124	27.2%	100.0%
1999	26,404	6,714	25.4%	6,480	24.5%	1,970	7.5%	1,870	7.1%	1,360	5.2%	820	3.1%	7,190	27.2%	100.0%
2000	27,618	7,110	25.7%	7,182	26.0%	2,118	7.7%	2,100	7.6%	1,444	5.2%	643	2.3%	7,021	25.4%	100.0%
2001	27,672	6,368	23.0%	6,701	24.2%	3,226	11.7%	1,856	6.7%	1,640	5.9%	645	2.3%	7,236	26.1%	100.0%
2002	28,530	6,488	22.7%	6,943	24.3%	3,369	11.8%	1,959	6.9%	1,694	5.9%	637	2.2%	7,440	26.1%	100.0%
2003	27,774	6,578	23.7%	6,825	24.6%	3,277	11.8%	1,449	5.2%	1,756	6.3%	596	2.1%	7,293	26.3%	100.0%
2004	27,054	6,321	23.4%	6,447	23.8%	3,329	12.3%	1,853	6.8%	1,606	5.9%	505	1.9%	6,993	25.8%	100.0%

(出所：富山県商工労働部観光課 2003、2004)

2-2 五箇山地域の観光客の動向

1995年から2004年までの五箇山地域(旧平村、旧上平村)の入込み数の動向を見てみると、当地域には毎年70万人前後の観光客が訪れている(表7)。1996年は、当地域が世界遺産に登録された(1995年12月登録)影響もあり前年比33.7%増の821,000人の観光客が訪れた。1997年も5.7%増の868,000人であったが、1998年から1999年にかけては減少した。2000年は、東海北陸道の五箇山インターチェンジの開通(2000年7月)、富山国体の開催などもあり9%増の820,000人まで回復した。2004年は、冬、春の観光客は増加しているが、夏、秋の観光客が大きく減少し、全体では前年比11.7%の減少になっている。

四季別では、夏から秋にかけての観光客が冬から春にかけての観光客の約2倍になっている。夏には長期休暇がとれること、また秋の紅葉などが観光客に好まれていることが要因と考えられる。

表7：五箇山地域の年度別、四季別入込数



(出所：富山県商工労働部観光課 2003, 2004)

2-3 旅行業界における五箇山観光誘致の取り組み

富山県内の旅行業界に聞き取り調査を実施したところ、中小の旅行代理店では特に五箇山ツアーに関する企画はないという回答であった。大手のJTBは、「大都市圏から白川郷・五箇山におけるツアーを企画しているが、当地域には団体向け宿泊個所があまりないため、宇奈月温泉や金沢市内・高山市内を宿泊商品地区として、日程組み込みを促進している。また、教育的要素の強い五箇山地区では主に中京圏・関西圏からの学生団体誘致を取組んでいる。特に関西圏からは高校の郊外学習を中心に販売強化を図り、五箇山での体験学習をセールスポイントに学校への企画提案を展開している」との回答を得た。

旅行雑誌等の出版媒体では、『るるぶ情報版』の2004年4月号で富山の特集を行っている。ここでは富山に対するイメージとして「神秘の海と癒しの山へ」というキャッチフレーズが使われている。五箇山に関しては、「穏やかな空気と素朴な人情にあふれる」や「伝統が息づく合掌造りの宿にとまる」等の民宿における交流を重視している。また北日本新聞社が企画した『五箇山の旅』(2004年9月)においても「ゆったり、美しい世界遺産と民謡の里を楽しむ」、「交わす言葉に温もる合掌造りの里で古の面影を巡る」などの見出しが見られる。

3 五箇山地域の住民の意識調査

五箇山地域が世界遺産に登録されたことにより地域住民にいかなる影響を与えたのかを調べるためにアンケート調査を旧平村、旧上平村で実施した(表1)ⁱⁱ。238のサンプルにより5段階(5:全くそう思う、4:少し思う、3:どちらでもない、2:少し思わない、1:全くそう思わない)による評価を行った(表8~表12、図1~図3)。

経済面では、「交通手段が良くなった」では、プラス評価(5段階と4段階の合計値)が54.3%、マイナス評価(2段階と1段階の合計値)が14.1%でプラス評価されている。一方、「所得増加に貢献した」では、プラス評価が23.1%、マイナス評価が32.8%、「雇用効果に貢献した」では、プラス評価が15.6%、マイナス評価が36.2%、「景気が上昇した」では、プラス評価が13.0%、マイナス評価が41.6%と住民の所得や雇用あるいは景気感に直接影響を与えてないことが窺える。この要因として近年の日本経済全体の不景気感が影響していると考えられる。また、「物価が上昇した」というマイナスの影響に対しては、2段階と1段階の合計値が41.6%、5段階と4段階の合計値が8.8%と物価にもあまり影響を与えていない。「ホテル等の大型宿泊施設の必要性」については、プラス評価が16.3%、マイナス評価が51.1%で半数以上の住民がその必要性を感じていないことが判明した。菅沼地区、相倉地区の14サンプルでは経済面に関するプラス評価は、全体の評価と比較するとかなり高いことが示されている(表9-B)。

社会文化面では、「観光客に対する理解が深まった」(プラス評価43.3%、マイナス評価14.3%)、「文化の保存に貢献した」(プラス評価69.3%、マイナス評価8.8%)、「五箇山のイメージや知名度をあげた」(プラス評価87.8%、マイナス評価2.1%)、「地域住民の愛郷心が向上した」(プラス評価58.0%、マイナス評価7.5%)とプラス評価の割合が高い。「五箇山のイメージや知名度をあげた」にマイナス評価をした住民のなかには、世界遺産に登録される以前にすでに五箇山は有名であったとの意見もあった。「住民の余暇に貢献した」という項目においては、プラス評価が17.7%、マイナス評価が33.1%とあまり影響がないようである。また、「犯罪が増加した」という項目に関しては、5段階と4段階の合計値が35.8%、2段階と1段階の合計値が31.1%であった。社会文化面では、菅沼地区、相倉地区でも全体集計とほぼ同じ傾向を示している。

環境面では、マイナスの影響である「ごみのポイ捨てが多くなった」(5段階と4段階の合計値47.5%、2段階と1段階の合計値18.9%)、「自然破壊が進んだ」(5段階と4段階の合計値28.9%、2段階と1段階の合計値24.8%)、「車の渋滞が多くなった」(5段階と4段階の合計値39.1%、2段階と1段階の合計値28.1%)と世界遺産登録によりマイナスの影響もあることが窺われる。また、「観光客が多く日常生活に支障をきたす」という項目に関しては、5段階と4段階の合計値24.7%、2段階と1段階の合計値34.0%となり五箇山地区全

体ではあまり影響を与えていない。菅沼地区・相倉地区でも5段階と4段階の合計値が28.5%とほぼ同様の傾向を示している。

住民の意識調査をまとめると、合掌集落を除いて経済面での影響は大きくないことが窺える。年間678,000人(2004年実績)の観光客が訪れる県内5番目の観光地であるが、観光客の滞在時間が短くて、集落を歩いて見学して次の宿泊地に向かうという形態の観光であるため地元の経済にはあまり影響を与えないのであろう。一方、宿泊型観光の場合は、大型宿泊施設が必要であるが、五箇山地区では75人を収容できる国民宿舎の「五箇山荘」があるのみなので、大型のホテルが必要と考えられるが、住民の意識として必ずしも大型の宿泊施設は必要としていない。従って、合掌造りの民宿をベースとした新たな観光の形態を考える必要がある。社会文化面では、「五箇山のイメージや知名度を上げた」が住民には強く意識されており、5の「まったくそう思う」が60.1%であった。また「文化の保存に協力した」という項目も強く意識されており、世界遺産に登録されたことにより、合掌集落の保存と活用ということが強く意識されるようになったと考えられる。

表8：住民アンケート用紙

富山国際大学 国際教養学部 「世界遺産 五箇山国際観光プロジェクト」
 (「五箇山が世界遺産に登録されたことによって地域住民にどのような影響を与えたのか」に関するアンケート調査)

評価基準 5:全くそう思う、4:少し思う、3:どちらでもない、2:少し思わない、1:全くそう思わない

		住民意識				
		5	4	3	2	1
経済面	交通手段が良くなった					
	所得増加に貢献した					
	雇用効果に貢献した					
	景気が良くなった					
	地場産業が活性化した					
	物価が上昇した					
	ホテル等の大型宿泊施設が必要である					
社会文化面	観光客に対する理解が深まった					
	文化の保存に貢献した					
	五箇山のイメージや知名度をあげた					
	地域住民の余暇に貢献した					
	地域住民の愛郷心が向上した					
	犯罪が増加した					
環境面	自然環境が良くなった					
	観光客が多く日常生活に支障をきたす					
	ごみのポイ捨てが多くなった					
	自然破壊が進んだ					
	車の渋滞が多くなった					
その他	性別	男性/女性				
	年齢	20-40代/ 41-60代/ 61以上				
	住所	旧平村/旧上平村				
プラスの影響		マイナスの影響		その他		
自由記述						

表 9 - A : アンケート調査結果 (旧平村、旧上平村全体)

	住民意識	まったくそう思う		少し思う		どちらでもない		少し思わない		まったそう思わない		無回答		合計	
		件数	割合	件数	割合	件数	割合	件数	割合	件数	割合	件数	割合	件数	割合
経済面	交通手段が良くなった	62	26.1%	67	28.2%	61	25.6%	9	3.8%	27	11.3%	12	5.0%	238	100.0%
	所得増加に貢献した	6	2.5%	49	20.6%	90	37.8%	29	12.2%	49	20.6%	15	6.3%	238	100.0%
	雇用効果に貢献した	4	1.7%	33	13.9%	102	42.9%	28	11.8%	58	24.4%	13	5.5%	238	100.0%
	景気が良くなった	2	0.8%	29	12.2%	99	41.6%	37	15.5%	58	24.4%	13	5.5%	238	100.0%
	地場産業が活性化した	7	2.9%	61	25.6%	80	33.6%	42	17.6%	35	14.7%	13	5.5%	238	100.0%
	物価が上昇した	6	2.5%	15	6.3%	104	43.7%	37	15.5%	62	26.1%	14	5.9%	238	100.0%
	ホテル等の大型宿泊施設が必要である	7	2.9%	32	13.4%	60	25.2%	39	16.4%	84	35.3%	16	6.7%	238	100.0%
社会文化面	観光客に対する理解が深まった	28	11.8%	75	31.5%	81	34.0%	19	8.0%	15	6.3%	20	8.4%	238	100.0%
	文化の保存に貢献した	80	33.6%	85	35.7%	32	13.4%	7	2.9%	14	5.9%	20	8.4%	238	100.0%
	五箇山のイメージや知名度をあげた	143	60.1%	66	27.7%	13	5.5%	3	1.3%	2	0.8%	11	4.6%	238	100.0%
	地域住民の余暇に貢献した	13	5.5%	29	12.2%	99	41.6%	37	15.5%	42	17.6%	18	7.6%	238	100.0%
	地域住民の愛郷心が向上した	45	18.9%	93	39.1%	65	27.3%	7	2.9%	11	4.6%	17	7.1%	238	100.0%
	犯罪が増加した	23	9.7%	62	26.1%	64	26.9%	23	9.7%	51	21.4%	15	6.3%	238	100.0%
	環境面	自然環境が良くなった	10	4.2%	35	14.7%	102	42.9%	41	17.2%	34	14.3%	16	6.7%	238
観光客が多く日常生活に支障をきたす		7	2.9%	52	21.8%	80	33.6%	26	10.9%	55	23.1%	18	7.6%	238	100.0%
ごみのポイ捨てが多くなった		43	18.1%	70	29.4%	65	27.3%	22	9.2%	23	9.7%	15	6.3%	238	100.0%
自然破壊が進んだ		17	7.1%	52	21.8%	90	37.8%	31	13.0%	28	11.8%	20	8.4%	238	100.0%
車の渋滞が多くなった		24	10.1%	69	29.0%	61	25.6%	26	10.9%	41	17.2%	17	7.1%	238	100.0%

註： ◯ : プラスの影響、 △ : マイナスの影響、 ○ : その他

表 9 - B : アンケート調査結果 (菅沼、相倉地区)

	住民意識	まったくそう思う		少し思う		どちらでもない		少し思わない		まったそう思わない		無回答		合計	
		件数	割合	件数	割合	件数	割合	件数	割合	件数	割合	件数	割合	件数	割合
経済面	交通手段が良くなった	4	28.6%	2	14.3%	4	28.6%	1	7.1%	3	21.4%	0	0.0%	14	100.0%
	所得増加に貢献した	2	14.3%	3	21.4%	5	35.7%	2	14.3%	2	14.3%	0	0.0%	14	100.0%
	雇用効果に貢献した	1	7.1%	5	35.7%	3	21.4%	1	7.1%	4	28.6%	0	0.0%	14	100.0%
	景気が良くなった	1	7.1%	2	14.3%	6	42.9%	2	14.3%	3	21.4%	0	0.0%	14	100.0%
	地場産業が活性化した	1	7.1%	3	21.4%	3	21.4%	2	14.3%	5	35.7%	0	0.0%	14	100.0%
	物価が上昇した	1	7.1%	1	7.1%	5	35.7%	3	21.4%	4	28.6%	0	0.0%	14	100.0%
	ホテル等の大型宿泊施設が必要である	0	0.0%	3	21.4%	3	21.4%	4	28.6%	4	28.6%	0	0.0%	14	100.0%
社会文化面	観光客に対する理解が深まった	1	7.1%	5	35.7%	3	21.4%	3	21.4%	2	14.3%	0	0.0%	14	100.0%
	文化の保存に貢献した	2	14.3%	5	35.7%	3	21.4%	1	7.1%	3	21.4%	0	0.0%	14	100.0%
	五箇山のイメージや知名度をあげた	7	50.0%	3	21.4%	3	21.4%	1	7.1%	0	0.0%	0	0.0%	14	100.0%
	地域住民の余暇に貢献した	0	0.0%	3	21.4%	6	42.9%	2	14.3%	3	21.4%	0	0.0%	14	100.0%
	地域住民の愛郷心が向上した	3	21.4%	4	28.6%	7	50.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	14	100.0%
	犯罪が増加した	1	7.1%	4	28.6%	5	35.7%	1	7.1%	3	21.4%	0	0.0%	14	100.0%
	環境面	自然環境が良くなった	1	7.1%	1	7.1%	8	57.1%	2	14.3%	2	14.3%	0	0.0%	14
観光客が多く日常生活に支障をきたす		1	7.1%	3	21.4%	6	42.9%	2	14.3%	1	7.1%	1	7.1%	14	100.0%
ごみのポイ捨てが多くなった		2	14.3%	5	35.7%	4	28.6%	0	0.0%	3	21.4%	0	0.0%	14	100.0%
自然破壊が進んだ		1	7.1%	4	28.6%	7	50.0%	1	7.1%	0	0.0%	1	7.1%	14	100.0%
車の渋滞が多くなった		1	7.1%	3	21.4%	7	50.0%	1	7.1%	2	14.3%	0	0.0%	14	100.0%

註： ◯ : プラスの影響、 △ : マイナスの影響、 ○ : その他

図 1 : 住民の意識調査 (経済面)

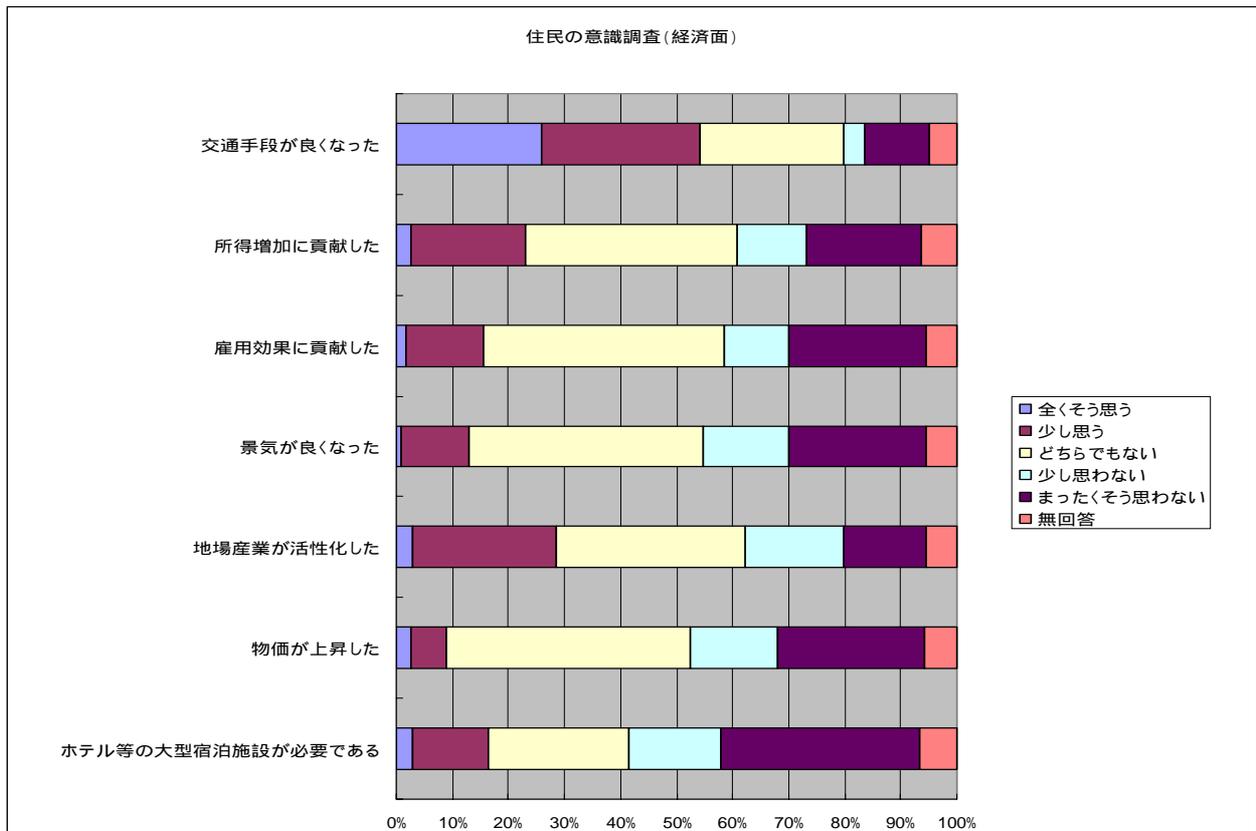


図 2 : 住民の意識調査 (社会文化面)

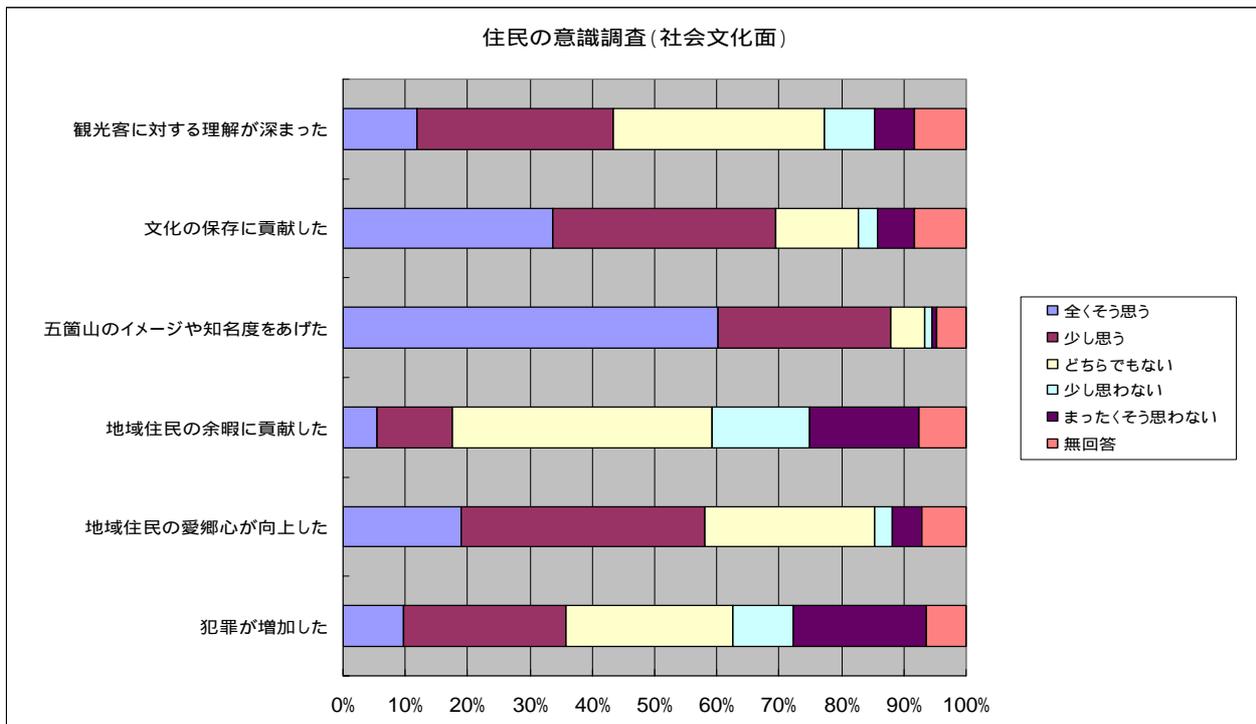


図 3：住民の意識調査（環境面）

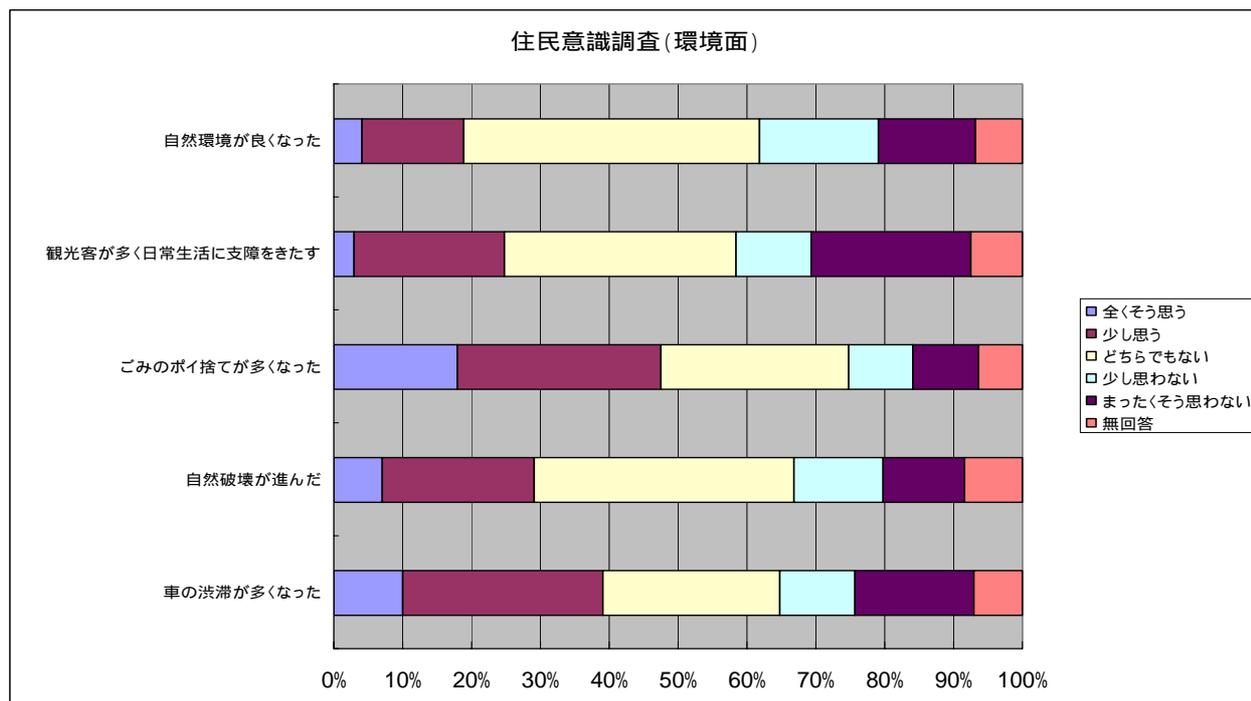


表 10：アンケートに回答した性別構成比（旧平村、旧上平村全体）

	男性		女性		無回答		合計	
性別	99	41.6%	130	54.6%	9	3.8%	238	100.0%

表 11：アンケートに回答した住所別構成比（旧平村、旧上平村全体）

	20～40代		41～60代		61以上		無回答		合計	
年齢	55	23.1%	92	38.7%	74	31.1%	17	7.1%	238	100.0%

表 12：アンケートに回答した年齢別構成比（旧平村、旧上平村全体）

	旧平村		旧上平村		無回答		合計	
住所	127	53.4%	77	32.4%	34	14.3%	238	100.0%

4 今後の課題

アンケート調査から窺えるように、五箇山地区の今後の観光を考えるにあたっては観光客のニーズに観光地や観光施設をあわせる従来型のマストゥリズムではなく、五箇山の特色を保持し、活かしていくようなエコツーリズムやグリーンツーリズムなどの新しい観光形態が考えられる。

グリーンツーリズムの成功例として高く評価されている新潟県高柳町と愛媛県内子町の事例を検討してみる。

高柳町は、ほくほく線十日町駅からタクシーで 30 分の位置にある。町全体が急峻な山あいをなし、中央をながれる鯖石川に沿って 19 の集落が点在する人口 2400 人の農山村である。この町では昭和 63 年から「住んでよし、訪れてよし」の町づくりのビジョンをつくり、次の 3 つの課題に取り組み「交流・観光」の展開を推進してきた（春日 2003）。

交流・観光コア施設（じょんのび村・県立こども自然王国）の整備

農山村の雰囲気の色濃いエリアに設定し、約 20 ヘクタールに保健・休養施設、農業関連施設、生活文化施設、特産品販売施設、スポーツ・レクリエーション施設等が整備されている（宿泊能力：120 名）
サテライト施設（かやぶきの里、月湯女荘など）の整備

村人の生活リズムで「暮らし」を体験し、交流を深めながら地域の活性化を目指すために「荻ノ島」「門出」の二か所に「公設民営」のかやぶきの宿が整備されている。

農山村の魅力づくり（純産品づくり、ブナ林の町有化、イベントの実施、町資源の見直し運動、集落の活性化など）

高柳では当地が持っている土地柄のよさを交流・観光という仕組みによって「掘り起こしたり」、「磨いたり」、「新たに付け足したり」することを地域活性化活動として継続的に取り組んでいる。例えば、純産品づくりではふるさと便、特産菓子、木工品、健康茶、豆腐、ブランド米など、イベントでは冬季イベント「You・悠・遊」（約 6000 人）、狐の夜祭（約 4000 人）など地域住民が主体となり、自らが楽しむとともに町外からも参加者を得て楽しんでもらっている。

これらの取り組みにより、平成元年には 5 万人以下であった観光客が平成 13 年度には 31 万人、公的関連施設の売上額は 5 億 6 千万円と推定されている。

町並み保存の事例として愛媛県内子町紹介する（岡田 2003）。内子町の町並み保存運動は昭和 50 年から開始した。「エコロジータウンうちこ」を町づくりの標語に掲げ、環境と景観を行政の主要施設として取り組んだ。その理由としては、「むら」が栄えてこそ「街」が生き残れるからであり、村が栄える手段としての自然環境、農村文化、景観など人が生きてゆくうえで失ってはならない資源を守り、育てるための地域住民運動が重要であった。また、町並み保存の場合は、保存条例等で土地や建物などの現状変更に関するあらゆる行為が許認可の対象事項となり住民の生活にはむしろ重荷となったが、こころある有志が中心となり運動が続けられた。内子町石畳地区（世帯数 120、人口 450）で進められている「むら並み保存運動」は、「自立」と「自律」をモットーに行政に甘えることなく自らの力で水車を復元し、蛸が育つ環境学習と実践を繰り返している。このような運動が各地でおこり地域個々の特性に磨きをかけながら、小さい観光振興への取り組みがはじまっている。

表13 相倉地域の民宿

民宿名	収容人数(人)
勇助	15
長ヨ門	15
庄七	15
三五郎	15
与茂四郎	15
五ヨ門	15
なかや	15
矢次	15
合計	120

五箇山地域の場合は、高柳町と同様に「国民宿五箇山荘」、「くろば温泉」、「ゆ〜楽」などの温泉施設、資料館等の施設、年間を通して開催される様々なイベントなど周辺施設、の農山村の魅力づくりに関しては充実していると考えられる。宿泊規模に関しても、国民宿五箇山荘や合掌集落にある民宿（表 13）を合わせると 200 人規模の宿泊が可能である。現状は、日帰り客が多いので、民宿の宿泊をベースとした観光客誘致が必要であろう。そのためには、4～5 人ほどのグループ（1 家族等）で 2～3 泊できるような小規模な観光が楽しめるようなメニュー（体験学習、スポーツ等）を作ること、また、五箇山地区の周辺施設を有機的につなぐような交流の場としてのコア施設が必要と考えられる。

五箇山のように地域住民の住む生活空間に訪問者を招き入れることによって成り立つ観光においては、ホス

ト社会の自立的な態度が強く求められている。すなわち訪問客とホスト・コミュニティとの交流関係を行うための「空間設計」、「演出設計」、「誘致設計」をホスト側から主体的に設計することが求められるのである。西山は、それぞれの設計について次のように述べている（西山 2001）。

「空間設計」とは、観光開発や再整備などによってツーリズムを展開する舞台を設計することである。具体的には、新たな観光資源の創出、既存の歴史的資源の観光施設としての活用のための整備、旧来からの観光施設の再整備などの直接観光客を惹きつける魅力（アトラクション）となる空間と地域におけるツーリズムの展開に不可欠な飲食施設や宿泊施設、衛生関連施設や交通関連施設などの整備が必要である。また、空間設計において注意すべき事として（1）ホストによる適切な案内などができる交流の場を作ること、（2）訪問客をむやみに生活空間に招き入れないこと、（3）ホストのプレゼンテーションの意思を的確に示す形の地域内の空間整備を行うことが挙げられている。このようにしてホスト側が地域空間に対する認識を深め共通の設計指針を持つ必要がある。

「演出設計」とは、地域を構成する様々な要素を統合して地域の魅力を訪問客に伝えることを意味する。重要なポイントは（1）演出行為がホストの主体的な意思に基づくこと、（2）演出対象はホストが誇りをもてるものであること、（3）対象が演出することによって変質しないようにすることである。

「誘致設計」とは、「空間設計」と「演出設計」によって準備された地域に招くべき相応しい客層を設定し、それらを誘致する対外向けの戦略であり、望ましい観光客の誘致方法をホスト側が主体的に設計することを意味する。そこでは「いつきてもらいたいのか」、「どんな人に来てもらいたいのか」という客層の設定、さらには旅行代理店や観光協会をいかに介在させるのか等の戦略も含まれる。設計上のポイントとしては、（1）旅行代理店依存を避け、独自の顧客ネットワークを持つこと、（2）旅行代理店に対して交渉力を持つこと、（3）観光客の通年化を図ること、（4）観光客の量的、質的制限を行うことが挙げられている。

五箇山において持続的観光を目指すのであれば、「空間設計」においては、ホストにおける適切な案内ができる場の創設と案内人の育成、また、「誘致設計」においては客層の設定と通年化、ターゲットを絞った体験ツアーの導入という点から検討する必要があると考えられる。

謝辞

本研究は、平成 16 年度富山県高等教育財団私立大学振興事業（研究活性化事業）の助成を受けたものです。また、2005 年 2 月 8 日から 2 月 11 日までのアンケート調査期間において旧平村および旧上平村の住民の皆様、教育関係の教職員の皆様、各行政センターの職員の皆様にはアンケートにご協力いただきました。以上の機関や方々に記して感謝申し上げます。

註

ⁱ 本稿は、佐藤悦夫・大西一成 2005 『平成 16 年度 富山県高等教育財団私立大学振興事業（研究活性化事業）助成金報告書：世界遺産、五箇山国際観光についての研究』の 1 章～3 章を加筆修正したものである。

ⁱⁱ アンケートの質問項目に関しては、山村順次・権純の論文（山村・権 2000）を参考にした。